第三講

30分

次の文章は、唯一の肉親であった兄を亡くした「小父（おじ）さん」の日々を描いている。兄は鳥のさえずりのような言葉を操る存在であり、その言葉を正しく理解できたのは「小父さん」だけだった。兄の死後、「小父さん」は、兄とともに小鳥を見に通っていた幼稚園の鳥小屋の掃除を定期的に行っていた。文章を読んで問いに答えよ。

鳥小屋の掃除に幼稚園へ通う以外の時間、小父さんはしばしば図書館で過ごした。公民館の二階にある、(1)こぢんまりした分館だった。借りるのは例外なく鳥にまつわる本で、図鑑や写真集や科学書はもちろん、わずかでも鳥に関わりのあるものを探しては順番に読んでいった。案外、借りるべき本は尽きなかった。野鳥の写真を撮影する方法を解説した指南書もあれば、色変わりしたコキンチョウの交配に生涯をかけたある小学校教師の伝記もある。ヨウムに言葉を理解させる研究レポートもあれば、白鳥に乗って旅をする少年のおとぎ話もある。孔雀（くじゃく）公園の飼育員、独房で文鳥を友とした死刑囚、密猟者、鳩（はと）料理専門店のシェフ、鳥の鳴き真似を得意

とする口笛演奏家……。登場人物は多彩だった。

小父さんが立ち寄る時間帯、分館は空いていた。カウンターの向こう側に司書が一人、絵本コーナーの丸いテーブルに子供が二、三人、あとは書棚の陰に幾人かが見え隠れしているだけだった。天井は高く、蛍光灯の光は弱々しく、床は所々軋(きし)んで切ない音を立てた。南向きの窓には用水路に沿って延びる遊歩道の緑が映っていた。掲示板に張られた新着図書到着の案内も、本の背表紙の分類シールもどことなく黄ばんでいた。

いつしか小父さんは書棚の前に立ち、背表紙に目を走らせるだけで、求める本をパッと見つけることができるようになっていた。それを読みたいか読みたくないかは問題ではなく、大事なのはただ一点、鳥がいるかいないかだけだった。たとえそこに『鳥』の一文字がなかろうと、鳥とはどんなにかけ離れたタイトルであろうと、小父さんの目は誤魔化せなかった。本の奥深くに潜むさえずりがページの隙間から染み出してくるのを、小父さんの耳は漏らさず捕らえた。その一冊を抜き取り、ページをめくると、案の定そこには鳥の姿があった。分館に収蔵されて以来まだ誰の目にも触れていないページに、長く身を隠していた鳥たちは、(ア)「やれやれ」といった様子で、小父さんの手の中でようやく翼を広げるのだった。

「いつも、小鳥の本ばかり、お借りになるんですね」

ある日、新しく借りる本をカウンターに置いた時、突然司書から声を掛けられ、(イ)小父さんは狼狽（ろうばい）した。貸し出しカードを手にしたまま、しばらく声の主に視線を向けられなかった。

「ほら、今日の本もそう。『空に描く暗号』」

司書は本を受け取り、タイトルを読み上げた。

「渡り鳥についての本でしょう?」

その時初めて小父さんは司書の顔を見た。幾度となく分館に来ていながら、司書を意識したことなどなく、目の前の彼女とこれまでに何度くらい顔を合わせているのか、見当もつかなかった。しかし少なくとも彼女が、小父さんの読書の傾向を正しく把握しているのは間違いなかった。

「はい……」

仕方なく小父さんはうなずいた。自分が選ぶ本に気を配っている人間がいようとは思いもせず、不意打ちをかけられたようで(2)気後れがした。

「ごめんなさい。別に利用者の方の借り出し状況をいちいちチェックしているわけじゃないんです」

小父さんの動揺を見透かすように彼女は言った。

「ただ、ここまで一貫している方はそういらっしゃらないので、何と言うか、とても圧倒されているんです」

彼女は『空に描く暗号』の表紙を撫(な)で、それから上目遣いにはにかんだ笑みを浮かべた。

　思いがけず若い娘だった。若すぎると言ってもいいほどだった。ふっくらとした頬にはまだあどけなさが残り、首はか細く、化粧気のない唇は潤んでつやつやしていた。短く切り揃(そろ)えられた髪は襟元で跳ね、無造作にめくり上げた事務服の袖口からは、白い手首がのぞいていた。

「ここに座っているとどうしても、誰がどんな本を借りるのかつい気に掛けてしまうんです。立派な老紳士が『不思議の国のアリス・お菓子大事典』をリクエストしたり、小学生の男の子がギリシャ哲学のシリーズを読破したり……。新着図書が到着すると、この本は誰の好みか、誰に相応(ふさわ)しいか、勝手に思い浮かべます。たまにその予想がぴったり命中すると、自分が善い行いをしたみたいな気分になるんです。そしてある時気がつきました。この人は鳥に関わりのある本しか借りない、って」

　まるでそれが素晴らしい発見であるかのような口調で、彼女は言った。小父さんはただあいまいに、「ええ、まあ……」と応じるしかなかった。

「一体どこまで(ウ)鳥の法則は続くのだろうかと、ずっとどきどきしていました」

　そう話しながら司書は、小父さんの手から貸し出しカードを受け取り、ノー

トに書名と分類記号と利用者番号を記入した。几帳面で綺麗な字だった。

「一見、鳥と無関係な本だと、ちょっと心配になるんです。だから返却された時、そっとページをめくって、鳥を探します。見つけられた時は、なぜかほっとするんです」

外見の幼さとは裏腹に、彼女の声にはあたりの静けさを乱さない落ち着きがあった。絵本コーナーの子供たちはいつの間にかいなくなり、他の人たちは皆書棚の間に隠れて姿が見えなかった。彼女がなかなか『空に描く暗号』を手渡してくれないせいで、小父さんはカウンターの前に立っているよりほか、どうしようもなかった。

「でも、今日は心配ありませんね。渡り鳥の本だって、はっきりしていますから」

ようやく彼女は本の上にカードを載せ、小父さんに差し出した。どう反応していいか分からないまま、彼は黙ってそれを受け取った。

「ね、小鳥の小父さん」

と、司書は言った。あなたは小鳥の小父さんなのだから、そう呼んだまでです、とでもいうような素直な微笑が口元からこぼれていた。思わず小父さんは「えっ」と短い声を上げた。

「幼稚園の子供たちは皆、そう呼んでいますものね」

小さくうなずいたあと、小父さんはズボンのポケットにカードを突っ込み、本を脇に挟んだ。

「返却は二週間後です」

そう言う司書の声を背中に聞きつつ、小父さんは分館を後にした。

帰り道、日曜日で閉まっている青空薬局の、入口に引かれた白いカーテンの隙間から何気なく中を覗(のぞ)き、ポーポーが姿を消しているのに気づいた。小父さんは自転車を止め、もう一度よく確かめた。やはり、ポーポーの入っていた広口ガラス瓶はどこにもなかった。それがあったはずのレジ脇には、口臭予防のガムが置かれていた。

ポーポーがないだけで、そこは自分の知っている青空薬局とは違う場所のように(3)よそよそしかった。先代の店主は死に、天井のモビールと小鳥ブローチはもはや跡形もなく、結局ブローチにしてもらえなかったポーポーたちも、飛び立てないまま待ちくたびれて打ち捨てられてしまった。

これで、お兄さんがポーポーのために特別に選ばれた人間であったことが証明されたのだ、と小父さんは自分に言い聞かせた。お兄さんが死んだからこそ、広口ガラス瓶は撤去された。あの中から一本を選ぶ権利がある、唯一の人間がお兄さんだった。ささやかな薬局の片隅で羽を休めていた小

鳥たちを、お兄さんは救い出したのだ。お兄さんにしかできないやり方で。

小父さんは再び自転車にまたがり、家路を急いだ。納棺の際、レモンイエローのポーポーをバスケットに納め、金具を閉じた時のパチンという音がよみがえってきた。言語学者の研究室へ向う汽車の中、終わりなく何度もその金具を開け閉めしていたお兄さんの震える指と、それを黙って見つめていた母親の横顔を思い出した。金具の音は、棺の蓋を閉める音よりもずっと正しく、お兄さんの死を証明していた。

自転車の籠の中で、借りてきたばかりの本がカタカタ鳴っていた。

「返却は二週間後です」

司書の言葉を、小父さんは声に出して言った。

「返却は二週間後です」

ペダルを踏む足に力を込め、もう一度繰り返した。本の立てる音と風の音に自分の声が紛れ、代わりに司書の声が耳元でよみがえってくるのを小父さんは感じた。(エ)<u>彼女の声をもっとよく聞きたくて、更に力一杯ペダルを踏んだ。</u>

（小川洋子『ことり』による）

（注）

○ポーポー――青空薬局で売っていた、包装紙に小鳥の絵が印刷された棒付きキャンディー。「小父さん」の兄は毎週このキャンディーを買い、包装紙がたまると貼り合わせて小鳥の形のブローチを作った。

問㈠　傍線の箇所（1）（2）（3）の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問㈡　傍線の箇所（ア）「『やれやれ』といった様子」には、「鳥たち」のどのような「様子」が表れているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問㈢　傍線の箇所（イ）に「小父さんは狼狽（ろうばい）した」とあるが、「小父さん」はなぜ「狼狽」したのか。その理由を本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問㈣　傍線の箇所（ウ）「鳥の法則」は何を指しているか。本文の内容をふまえて三十字以内で説明せよ。

問㈤　傍線の箇所（エ）「彼女の声をもっとよく聞きたくて、更に力一杯ペダルを踏んだ」には、「小父さん」のどのような気持ちが表れているか。「小父さん」の心情の変化に着目して七十五字以内で説明せよ。

（次ページより解答欄）

問㈠

①

③

②

問㈡

問㈢

問㈣

問㈤

第三講　解答

問㈠

(1) 小さく程よく整っている様。

(2) 相手の勢いに押されてひるむこと。

(3) 親しみを感じられなかった。

問㈡

誰の目にも触れられなかった鳥のページが、やっと開いてもらえたかと安堵する様子。

問㈢

小鳥の本ばかり借りることを、今まで意識したこともなかった司書から突然指摘されたから。

問㈣

「小父さん」が借りるのは必ず鳥に関連する本であるという法則。

問㈤

兄の死後、他者との交流がない生活を送っていたが、鳥を救った兄の死を前向きに受け止めることができ、司書との交流を楽しみにする気持ちになっている。